

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：12606  
 研究種目：基盤研究(B)  
 研究期間：2012～2014  
 課題番号：24320036  
 研究課題名(和文) 大学と地域の連携による江戸伝統音楽・芸能の継承支援：新たなインリーチを求めて  
  
 研究課題名(英文) A supporting project for better inheritance of Edo performing arts through community-university cooperation : in pursuit of a new concept of "in-reach" activity  
  
 研究代表者  
 植村 幸生 (UEMURA, Yukio)  
  
 東京藝術大学・音楽学部・教授  
  
 研究者番号：80262252  
  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,200,000円

研究成果の概要(和文)：大学附設の民族音楽アーカイブを拠点とし、地域の邦楽器製作者や販売者らとの協働を前提に、邦楽専門家を擁する拠点大学の地の利を生かして、当該地域の児童生徒や学内学生むけ地域文化プログラムの開発と提案を行った。具体的には、下町の邦楽器製作者/職人への取材をもとに、楽器製作や技の継承をめぐる今日的課題を明らかにし、これに関する問題意識を次代を担う若い世代に喚起すべく、展示と実演の場を設けた。同時に、邦楽を含む下町の伝統芸能や儀礼について、広義の担い手・上演場所・機会を項目とするデータベースを作成し、邦楽を育んだ土壌を通時的に俯瞰する手だてを、アーカイブから発信する準備を整えた。

研究成果の概要(英文)：Our laboratory, the Koizumi Fumio Memorial Archives of Tokyo University of the Arts, developed an educational program promoting Japanese traditional music (hogaku) and instrument-making culture in the Shitamachi area of Tokyo, using the musical / cultural resources of the university and the experts in the local community. Firstly we investigated present issues surrounding the inheritance of the instrument-making skills through interviews with instrument manufacturers. And then we invited some musicians and instrument-makers to the university to give an exhibition and a workshop presenting current situation and their confronting problems of traditional music and instrument-making of Shitamachi area. We also provided a preparatory database of traditional performing artists and rituals / festivals in this area. The database, when published through our website, will enable you to easily get a historical overview of cultural environments of Shitamachi, which have nurtured traditional music.

研究分野：音楽民族学

キーワード：地域文化 伝統芸能 アーカイブ インリーチ 楽器製作 下町

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 大学所属アーカイブからの情報発信について：研究代表者の植村は、東京藝術大学音楽学部を設置された民族音楽アーカイブ(小泉文夫記念資料室)の責任者として、所属研究員とともに、アーカイブが学内外にいかに関与するかを模索してきた。音楽学部では唯一の一般公開施設とはいえ、大学内に置かれるため利用期間は限られ、所蔵資料の利用頻度も頭打ちである。状況改善のため、平成18-20年度には「芸術系大学における楽器資料の教育資源化」(科学研究費補助金基盤研究B、課題番号18320028)を実施し、学内カリキュラムの再検討と同時に、学外児童向けウェブ教育コンテンツ「アジアの楽器図鑑」(下記URL)を製作公開した。こうして、对外情報発信の目的は達したが、研究成果の一方的な公開にとどまり、利用者との双方向的な関係は望み得なかった。

<http://koizumi2.ms.geidai.ac.jp/asia/jp/index.html>

幸い東京藝術大学は2004年から児童向けイベント「藝大とあそぼう」を実施し、周辺地域から多くの児童を迎えて、多彩なプログラムを提供していたため、2010年度には小泉文夫記念資料室も、サイト「アジアの楽器図鑑」と所蔵楽器を併用するワークショップを実施し好評を得た。とはいえ、単発のイベントで、しかも低年齢層の児童を対象としたため、想定内の反応を確認したにとどまった。

(2) 「地域」と「大学」の協働をアーカイブが媒介する情報の還流 = 新たなインリーチ開拓の必要性について：上掲の「アジアの楽器図鑑」を作製する過程で、伝統音楽の需要が著しく減少し、伝統楽器を製作する技術の伝承も危うい現状を、実感した。本研究組織の拠点 = 東京藝術大学が位置する上野は、江戸時代以来、伝統芸能の隆盛を支えた下町の伝統を残す。周辺には伝統楽器の製作者、すなわち物づくりの技を継承する専門家も少なからず存在する。また東京藝術大学は邦楽科をそなえ、演奏者の養成についてはノウハウの蓄積がある。そこで本研究組織は、地域コミュニティの成員を学内に迎え入れ、彼らの専門的な知識や技術、人的ネットワークを学内の研究教育資産として取り込み、同時に学内の研究蓄積を加味して地域教育に還元する構想をもつに至った。その軸に据えたのが「下町」文化の再考や技術継承である。

ここでアーカイブの一般的な事業を振り返ると、アウトリーチ活動は、昨今、福祉事業や博物館、美術館など芸術文化施設、地域活性化をめざす地方自治体などで盛んに論じられ、ワークショップを伴う実践活動も多様な展開を見せている。たとえば福祉施設への音楽家派遣や、利用者層の拡大と文化普及を狙う公的文化施設による出張講義やコンサート、地方自治体が市民のもとに出向いて開催する各種イベントなどが該当する。本研究と関連が深いのは、博物館や美術館など公

的文化施設の取り組みである。「アウトリーチ活動のすすめ：地域文化施設における芸術普及活動に関する調査研究」(財団法人地域創造 平成12年度調査研究報告)によれば、

芸術普及事業が施設の設立趣旨である、これからの文化施設の役割として、従来型の公演や演奏会、展示会だけでは不十分、日頃、芸術に触れる機会の少ない市民や地域に対して広く芸術を普及する、といった理由で、積極的なアウトリーチを目指す施設が増え、活動のイメージもかなり明確になっている。

これに対してインリーチは、各種文化施設に人々が訪れ活動を楽しむことが原義である。つまり従来の演奏会や展示会での集客を指すわけだ。しかし活動資金獲得のため“文化施設の運営母体である地方自治体の理解促進をはかること”といった、限定的な語釈もめだつ。本研究がめざしたのは、原義の発展形としての“インリーチ”であり、地域コミュニティとの協働を前提とする。つまり大学を拠点とする文化普及活動である以上に、文化活動を介したソーシャル・キャピタルの形成促進、あるいは地域文化のキュレーション、というべきである。

## 2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ、大学附設の民族音楽アーカイブを拠点として、地域の楽器製作者、販売者、音楽家と協働しながら、地域社会と学生の双方に向けた音楽・芸能文化支援プログラムの開発と提案を行うことが本研究の目的である。そのために、大学組織のなかに地域社会の音楽家、楽器製作者といった専門技術者を招き入れ(インリーチ)その技術を大学内の文化資源と組み合わせる。それによって大学の知的資産の社会還元、および地域の文化資源に対する関心の喚起とその有効活用を同時に果たすことを目指す。

## 3. 研究の方法

(1) 邦楽器製作者を対象とした、個人史、創業史、技術継承状況の聞き取り調査。

これは、次項目に挙げるデータベース構築の前段階にあたる。職人の技術習得の過程、家業との関連性など、技術が世代を超えて伝えられる経緯に注目しインタビューを行った(詳細項目は(2)参照)。調査対象としたのは、下町(台東区を中心として江東区、足立区も含めた)に点在する邦楽器製作者/小売店のうち、取材に応じた以下7社である：[台東区]有限会社南部屋五郎右衛門(太鼓)、株式会社岡田屋布施(太鼓ほか)、宮本卯之助商店(太鼓ほか)、小倉楽器店(笛)、菊岡三絃店(三味線)[足立区]大塚竹管楽器(笛)、有限会社大岡楽器(笛)。このほか、地域の枠組からは外れるが、邦楽器の弦を生産する(株)丸三ハシモト(滋賀県)と、三味線と同類楽器である沖縄の三線や胡弓等の製作者も調査対象とした。こうして、下町の楽器製作の歴史や実態を、

楽器職人個々人のレベルでさぐり、当事者の了承を得られる範囲で明文化し、一般公開をめざすことにした。同時に、楽器製作の重要なポイントを理解するために、各楽器の製作過程について、企業秘密に触れない範囲内で取材録画した。

(2)「江戸東京音楽芸能データベース」の作成。

邦楽器製作を含めて、下町における伝統文化の継承・推移を俯瞰するデータベースを製作した。調査項目は以下の4カテゴリーに分かれる。

(1)楽器職人[氏名、生年月日、所在地、出身地、創業年代、技能修得の経歴(指導者、場所、期間、家庭環境)、取扱う楽器の種類、素材とその入手先、取引先、年間生産量、継承者養成の有無ほか]。(2)音楽・芸能従事者[氏名、生年月日、所在地、経歴、学習歴(指導者、場所、期間、学習対象、家庭環境、月謝の有無) 現在参加する活動]。(3)行事 [2月:節分、初午、5月:下谷神社、浅草神社他の祭礼、6月:第六天禰神社、鳥越神社他の祭礼、8月:谷中圓朝まつり(全生庵)、11月:白鷺の舞(浅草寺境内)、西の市(鷲神社)など]。(4)場所 [江戸から平成に至る祭礼や娯楽施設など、音楽・芸能の拠点]。

音楽・芸能従事者については、「東京日日新聞」ほか新聞資料や寄席芸人の既刊資料をもとに、寄席や劇場に出演した著名人をピックアップした。とくに江戸時代以来、歌舞伎や演劇、寄席、見世物小屋などが林立した浅草地区については、資料が比較的充実しており、約40名の情報を入力できた。ただし、各時代の芸能従事者情報を、下町の各地域について網羅的に入手することは非常に困難であった。このため『明治四十一年東京市市政調査職業別現在人口表』、明治37年から昭和11年刊行の『警視庁統計書』、戦後は国勢調査をのぞき、めばしい典拠資料が得られない状態であった。については、台東区編集刊行『重ね地図で江戸を訪ねる上野・浅草・隅田川・歴史散歩』(2012)や、エービービーカンパニー編『江戸/東京芸能地図大鑑』(2002)など、既往資料から主な情報を選定した。

(3)上記(2)の公開を含めて、「地域」と「大学」の協働をアーカイブが媒介する情報の還流を促す具体的な方策を検討した。

#### 4. 研究成果

(1)楽器製造業者への取材を通じて明らかになった事項

楽器製作に見る「下町」文化の歴史的な影響、および現状:今回、主な調査対象となった三味線・太鼓・篠笛は、江戸以来、脈々と下町に根付く伝統楽器、といったイメージで語られることが多い。その実、今回の取材先で、江戸時代から下町で操業をつづける業者は、わずか1軒にとどまった。その他の業者は、すべて明治・大正期に地方や東京都下の他所

から移って操業を始めたものである。明治以降、地方から東京へと急速に人と物が集まったので、楽器製作者も時代の波にのり、寺社の祭礼や芸能、遊郭の存在を背景に、邦楽(器)の消費がさかんな下町をめざしたと推測される。さらに、異業種からの転身もみとめられ、江戸時代以来の小間物屋が、明治期に入って華族や芸者が所蔵した楽器の販売を仲介し、やがて太鼓の製作販売に特化した事例や、婚家の家業を継ぐため、車輛製作から笛作りに転じた職人の例などを確認した。

上掲3種の楽器で、江戸下町以来の伝統との影響がもっとも端的に表れたのは太鼓である。明治以降、浅草地区は、鞆や靴など皮革製品の生産地として知られたが、もともと浅草今戸地区(現在の台東区北部)は牛馬の解体業者など皮革加工の専門業者が集中する地域で、太鼓についても、素材の入手から加工製作にいたるまで、一貫して彼らが担い手となっていた。その営業範囲は江戸に留まらず、関東一円に広がった。寺社への太鼓奉納を下地として、明治以降は神輿や仏壇、神棚の製造販売も始まり、物作りの範囲が広がったことも確認された。

楽器製作と技術伝承をめぐる今日の課題:まず全ての楽器に共通して深刻なのは、素材調達の高難しさである。三味線の胴革には従来猫皮や犬皮を用いてきたが、1960年代以降、動物愛護法や社会通念の変化により日本国内での調達は不可能となり、台湾や中国、東南アジアからの輸入が頼みの綱となってきた。今やそれすらも不可能になる恐れがあり、製造業者にとって最大の難題となっている。篠笛の素材となる良質な竹も、伐採業者の激減や産地の環境悪化が原因で、入手が難しい状態である。素材調達に比べると、製造技術の継承問題の深刻さは、楽器ごとによりレベルが異なる。邦楽離れの直接的影響を被った三味線では、需要の激減で商売自体が成り立たず、作業工程も複雑で細分化しているため、後継者の育成が危機に瀕して久しい。かたや篠笛は、昨今のお囃子ブームで安定した注文が見込める上に、製作工程も比較的簡単なので休業期間も短く、若い跡継ぎが順調に育っている。その反面、他の業者や外国の業者が容易に模造品を作り、商標を侵害される点が懸念材料であるという。

(2)「地域」と「大学」の協働をアーカイブが媒介する情報の還流について

この点については、江戸伝統音楽・芸能の継承と発展をテーマとした企画展示とワークショップの開催によって、実践的なモデルの提示をおこなった。

企画展示「邦楽器が受け継ぐ 技・形・音こめられた丹精」の開催(平成26年11月20日(木)~11月30日(日))於:東京藝術大学正木記念館1階。本展では、(1)に挙げた調査結果をもとに、邦楽器に集積した知恵と技に光をあてた。地域の特性との関連にも注目し、台東区を中心とした邦楽器製作者に

協力をあおいで、実物資料の提供を受けるとともに、写真、動画、楽器製作者の実演をまじえた企画を実施した。実演は(1)の調査対象とした有限会社南部屋五郎右衛門(太鼓)と菊岡三絃店に依頼した。

ワークショップ「三味線は「わざ」のかたまりだ! さくろう伝統楽器の世界」の併催。上記企画の一環として、台東区内の中学生を含む生徒・学生約20名を対象として、ワークショップを開催した。ここでは、三味線の製作過程を取材した動画の学習、三味線製作者による胴革貼りの実演見学、東京藝術大学邦楽科による演奏の鑑賞、そして研究分担者・小島直文准教授ほかが指導にあたる演奏実習を、児童生徒にセットで体験させた。参加者からは、a.自分の身近な地域で邦楽器製作が行われていたことを初めて知った、b.楽器の製作は想像以上に複雑で繊細だった、c.楽器作りの実演では、楽器作りの実際を見ただけだけでなく、材料や道具に触れたり、修業体験や楽器作りに関する製作者の話を通じて、非常に興味をもった、といった率直な感想がよせられた。保護者からも、類似の催しの継続を希望する声も聞かれた。

以上の企画展示やワークショップによって、初歩的な地域コミュニティとの協働は果たせたと考えるが、区の行政機関や学校との連携については、当初希望したレベルには及ばず、長期にわたる継続的な働きかけによって、協働関係を築くことが課題となった。

江戸東京音楽音楽データベースの試作本DBは、江戸、明治大正、昭和以降の3代にわたって、上記3(2)で言及した三つのカテゴリーを地図上で表示する、一種の歴史ジオラマである。今回の研究実施期間では、当初予定した(1)楽器職人(2)音楽・芸能従事者(3)行事(4)場所の全項目を含む実装にはいたらず、(1)楽器職人の項目のみにつき、プロトタイプを試作した。インタビュー内容(文字情報)のほか、楽器製作者から提供を受けた明治大正時代の店舗や職人の写真など、画像ファイルも加えて、邦楽器製作とこれを取り巻く環境の変遷を、視覚的に辿れるよう考慮した。今後は、(2)(3)(4)の要素を順次補充し、小泉文夫記念資料室HPから公開する予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

松村智郁子、明治期のカラオケ・紙腔琴(2)「曲譜」の仕組みと音の関係、東京藝術大学大学美術館<平成24年度>、2014、pp.42-44

植村幸生、朝鮮時代軍楽の社会・文化史に向けて、査読なし、日韓文化交流基金 NEWS 71、2014年9月、pp.8-9

松村智郁子、明治期のカラオケ・紙腔琴(1)

当時の新聞記事・広告からその人気を探る、東京藝術大学大学美術館23年度年報、査読なし、2013、pp.35-39

〔学会発表〕(計5件)

植村幸生、日本箏曲の改革者たち、第2回弾撥音楽節、2014年11月14日、中央音楽学院、北京(中国)

植村幸生、コトと箏曲の社会史、2014韓中日伝統音楽セミナー「伝統芸術の歴史と現況：琴箏類楽器の相互交流および独自性」、2014年11月4日、全南大学校、光州(韓国)

植村幸生、韓国宮廷音楽の楽譜化を通してみる近代の経験、2013年12月6日、延世大学校人文学研究院HK文字研究事業第15回招聘講演、ソウル(韓国)

尾高暁子、台湾・中国の大正琴、日本音楽学会(支部横断企画)2012年10月20日、静岡文化芸術大学(静岡県浜松市)

Akiko Odaka, The resonance hole with membrane; a distinctive feature of East Asian transverse flutes, Acoustics 2012(米、中、香港、太平洋地区音響学会2012合同大会)2012年5月2日、Hong Kong Conference and Exhibition.香港。

〔図書〕(計2件)

植村幸生、DSR シルクロードの音楽(デジタルコンテンツ)2015年3月12日公開。(監修および第4章、第5章執筆)  
<http://dsr.nii.ac.jp/music/index.html>

松村智郁子、明治期における箏管蓄音機の受容と普及の研究 音楽、声の記録と社会的背景を中心に、(研究代表者:松村智郁子、課題番号23520156、平成23-25年度日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究(一般)研究報告書、2014、pp.1-581

## 6. 研究組織

(1)研究代表者 植村 幸生 (UEMURA, Yukio) 東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号: 80262252

(2)研究分担者 薩摩 雅登 (SATSUMA, Masato) 東京藝術大学・大学美術館・教授

研究者番号: 80272657

(3)研究分担者 小島 直文 (KOJIMA Naofumi) 東京藝術大学・音楽学部・准教授

研究者番号: 90712547

(4)研究分担者 尾高 暁子 (ODAKA Akiko) 東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号: 00397019

(5)研究分担者 松村 智郁子 (MATSUMURA Chikako) 東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号: 60436699

(6)研究分担者 久保 仁志 (KUBO, Hitoshi) 東京藝術大学・総合芸術アーカイブセンター・助手

研究者番号: 00626765

(7)連携研究者 塚原 康子 (TSUKAHARA Yasuko) 東京藝術大学・音楽学部・教授

研究者番号: 60292181